

「日本天台における衆生観の一考察」

大正大学 塩入法道

仏教において衆生とは何を意味するのであろうか。一般的には、「生きとし生けるもの、生命あるもの」という程の意味で使われることが多いが、生物全般なのか、人間なのか、仏菩薩も含む十界の生存全体なのだろうか。中国や日本で展開した瓦礫や山川草木にも仏性があるという説に従えば、これらも衆生である。大乘菩薩の重要な徳目として、「下化衆生」「済度衆生」が主張されている。つまり教化の対象である。また天台教学では「心仏衆生是三無差別」を理論的に展開し、自己心と衆生と仏とを別個の客観的存在として対象的に捉えることを否定している。衆生に関しては様々な方面から論じられるだろうが、本発表では衆生とは一応「広く仏道に与るもの」と規定した上で、日本における神仏習合の観点から、衆生としての神祇について、主に最澄や初期日本天台ではどのように対応し位置づけてきたかを考察したい。なおこのことは最澄や日本天台に限った問題ではないので、当時の仏教界の状況も考慮したい。

すでに奈良時代より神宮寺成立の説話において、「吾れ宿業に因り神となりて固より久し。今、仏道に帰依し福業を修行せんと欲す。」(気比神宮寺)、「仏法に帰依し、以て神道を免れんと思ふ。」(若狭神願寺)、「吾れ久劫を経て、重き罪業をなし、神道の報いを受く。いま冀ば永く神の身を離れんがために、三宝に帰依せんと欲す。」(多度神宮寺)等、仏教の力によって神身離脱を願う神祇が登場している。最澄の伝記にも、「われは法音を聞かず、久しく歳年を歴たり。幸に和上に値遇して正教を聞くことを得たり。」(宇佐八幡宮)、「伏して乞う。和上は幸いに大悲の願海に沐せしめて、早く業道の苦患を救いたまえ。」(香春神宮)等、神祇の願にに応じてこれを救済しようとする姿勢がうかがえるのである。

日本の神祇は仏教の天部に対応すると考えられたようだが、もちろんそれは仏教側からのアプローチであり、神祇も「仏教に与る」衆生として取り込もうとした意図が見え隠れする。また早くから八幡大菩薩とか多度大菩薩等の菩薩号を与え、神祇に対して非常な敬意を表してもいる。そのあたりを最澄やその周辺はどのように考えていたのだろうか。仏教の普及手段として意識的に対応したのであろうか。あるいは当時の仏教界の趨勢に無意識的に従っただけであろうか。仏教あるいは天台の教理とどのように整合性を持たせたのか。最澄にはこのことを直接に論じた文献はなく、伝記等の資料から推測するしかない部分もあるが、結果的には、大比叡小比叡を始め日本国中の大小の神祇を最大限に尊重しており、それは現代にも踏襲されている。つまり日本における衆生としての神祇は、インド以来の天部としての位置づけと共通するところもあるが、一方でかなり異なった展開を見せたのではなかろうか。

以上のような問題意識のもとに、神仏習合の観点から最澄や初期日本天台の衆生観の一端を考えてみたい。